

早稲田社会学会ニュース 第24号

2004年8月25日発行

早稲田社会学会事務局
〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部 社会学研究室内
Tel: 03-5286-3742
E-mail: hanna1106@asagi.waseda.jp

今回のニュースの内容

1. 第56回早稲田社会学会大会の報告
2. 早稲田社会学会総会の報告
3. 研究例会の報告
4. 2004年度の研究助成について
5. 『社会学年誌』著作権について
6. 記念出版事業について
7. 入退会者のお知らせ
8. 学会費納入のお願い

1. 第56回早稲田社会学会大会の報告

第56回早稲田社会学会大会は、2004年7月3日（土）に早稲田大学文学部 第1会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者 澤口恵一（大正大学） 榎本 環（早稲田大学）

報告者

森 泰生： 現場からの報告——「売り子」はシニア向きの仕事

七邊信重（早稲田大学文学研究科）： サブカルチャーの消費と生産をめぐる日本社会の認識の変化——「おたく」に関する非当事者のイメージと当事者の実態のズレの考察から

小藪明生（早稲田大学文学研究科）： ソーシャル・キャピタルと社会的ジレンマ

薦田祥子（早稲田大学文学研究科）： 秩序問題の再定位

浅輪 亨（早稲田大学文学研究科）： 差異という事態と社会性——ニコラス・ルーマンのコミュニケーション論における理論的知見とその展開

シンポジウム

テーマ：『社会』の蒸発 液状化する社会の諸相

司会者：長谷正人（早稲田大学）

報告者：奥村 隆（立教大学）：社会という不条理／社会という無根拠

山田真茂留（早稲田大学）：浮遊する個別主義

土井隆義（筑波大学）：犯罪不安の社会的構築

討論者：正岡寛司（早稲田大学） 高橋順一（早稲田大学）

<シンポジウム報告> 司会者・研究活動委員会委員 長谷正人（早稲田大学）

このシンポジウムは昨年度と同じ研究活動委員会の企画として、いわば昨年度のシンポジウムの「続編」として行われたと言えるかもしれない。すなわち昨年度のテーマ「社会学のアルケオロジー」が、社会学の成立や社会という概念の歴史的推移をフーコー的なエピステモロジーによって問い直そうとしたものであったのに対して、今年度は、そのようなメタ理論的な議論の抽象性への反省もあって、そのような問いかけの元にあった、「社会の蒸発」という具体的な現状認識を社会分析として主題化しようとしたものである。

しかし最初の報告者、奥村隆氏（立教大学）は、そうした現状認識を際立たせるためにあえてアルケオロジックな認識の問題から出発し直した。つまり最初に社会学をはじめたコントにあっては、「社会」が誰もコントロールできない不条理な謎のようなものとして見えていたのであり、それは現代の社会学者や若者たちがしばしば悩むように、「社会」は構築された相対的なものであって無根拠なものとして見えてしまうことは決定的に違っていたことを主張した。現代の社会学的認識は、不条理なものとしての「社会」を無根拠なものに変換することで何かを失ったのだ、と。

続いて山田真茂留氏（早稲田大学）は、具体的な現代社会論として、自らの議論を提示された。つまり「社会の蒸発」が研究者だけでなく生活者のレベルでも起きていることを、日本人の価値観調査における「他者への信頼感」の喪失というデータとして示された後、そのような他者への信頼感の喪失が、「社会的カテゴリー準拠」の全否定のために生じているのではないかと主張された。社会的カテゴリーの執拗な存続を批判したり、容易な解消の可能性を主張したりするのではなく、他者を信頼してカテゴリーをめぐる道徳的な交渉を持続させることが重要なのではないかと。

最後に土井隆義氏（筑波大学）は、犯罪社会学者としての立場から、2001年の改正少年法施行という特定の問題に焦点をあてられた。この改正少年法——少年への厳罰化と被害者に対する配慮を特徴とする——が可能になったのは、人々が「子供の社会化」をめぐるリアリティを喪失して、社会以前にあるパーソナリティや心の問題を原因として少年犯罪が生じると考えるようになったからである。しかし土井氏の論点は、このような「社会の蒸発」的な考え方自体が、現実の社会を作り出しているという現実構成主義的な問題だろう。その意味で、前二者とは微妙なずれを孕んだ報告だった。

これらの報告に対して、最初の討論者・高橋順一氏（早稲田大学）は、「社会の蒸発」に見えているものは実は「全体化」の進行なのではないかと切り返され、続いて正岡寛司氏（早稲田大学）は、戦争直後の歴史的变化をめぐる個人的体験と、人類史における感情の起源の問題という両極から、全体の議論を相対化された。これらの報告とコメントのあとに、フロアも含めてさまざまな有益な議論が行われたが、それらまとめることは私にはとてもできない。ただ高橋氏が「人間は無根拠に耐えなければならない」という思想を提示されたのに対して、山田氏が「それでも耐えられない人間がいるということが問題なのだ」と反論されたのが印象的だった。この二つの論点のあいだに、このシンポジウムの論点は成り立つのだと思う。

ある意味で今回の企画の中心人物である私は、あえて「社会」とは何かという定義を明確にしないまま、「社会の蒸発」という社会学に疑義を付すような問いを報告者たちに強引にぶつけるという乱暴なやり方をとってしまったにもかかわらず、報告者・討論者・フロアの参加者の誰もが、社会学的認識の可能性を賭けるように真摯にこの乱暴な問いかけに応じようとしたことに強い感銘を受けた。例年とは違って、若い学生をも含んだ70名を越える多くの聴衆も、この真摯な議論から何かの思考のかけらを持ち帰れたのではないかと信じている。だが始めからわかりきったこととはいえ、何かの答えの方向性さえ出たわけではなく、問いは開かれたままである。

なお、このまとめが、あまりにも報告者の議論の論点の一部にしか触れえていないこと、そして私の視点

からかなり歪曲化していることを深くお詫びする。しかしそれもまた「信頼」の問題なのではないかと少しだけ思う。

2. 早稲田社会学会総会の報告

2004年7月3日に、大会に引き続いて開催された総会において以下の事項が報告されました。

- 1) 理事会および研究活動委員会、編集委員会の活動報告（2003年7月～2004年7月）
- 2) 庶務委員会の設置
- 3) 2004年度研究助成の申請と採用の経過について（庶務担当理事）
- 4) 出版記念事業について

また、同総会において以下の議案が提案され、慎重な審議の結果、すべて原案どおり可決されました。

- 1) 2003年度決算案の審議と承認（同封の決算報告をご参照ください）
- 2) 2003年度会計監査報告（同封の決算報告をご参照ください）
- 3) 2004年度予算案の審議と承認（同封の予算報告をご参照ください）

3. 研究例会の報告

第23回（2004年度第1回）研究例会が以下のとおり開催されました。

日時： 2004年5月15日（土） 14:00-18:00

会場： 早稲田大学文学部 第五会議室

報告者および報告題目：

大谷 崇氏（高崎経済大学非常勤講師）

「社会の窮状化に抗して —ブルデューのネオリベリズム批判が問いかけるもの」

七邊 信重氏（早稲田大学院文学研究科）

「80年代以降の日本社会の変容--「おたく」に関する雑誌記事の分析を通して」

<研究例会報告>

春の研究例会は、本年度の大会シンポジウムのプレ企画として、「社会の〈液状化〉を問う」という共通テーマのもとで2つの報告が行われた。

七邊氏は、いわゆる「おたく文化」——アニメ、マンガ、ゲームとその二次創作物（原作のキャラクターや設定を用いて造られるマンガや模型）——とその担い手の若者たちの現場である「同人誌販売会（二次創作物の出展会）」で行った参与観察にもとづき、社会の「断片化」について論じた。氏によれば、従来「おたく文化」に関する社会学的研究は、「おたく」たちの対人関係能力の低さとそれにとまなう社会性の欠如に焦点をあてるが多かったが、参与観察によって見えてくるのは、「おたく」たちの文化生産・消費・仲介者としての側面であり、個人主義化（メディアへの沈潜）とネットワーク化（メディアを介した協働のネットワーク形成）が相互に関係しながら同時進行している「おたく」たちの現場の姿である。

大谷氏は、晩年のピエール・ブルデューによる激しい「ネオリベリズム」批判を、ブルデュー社会学の理論構成から読み解くことを通じて、われわれが直面している社会の「窮状化」を理論化する手がかりを探った。氏によれば、ブルデューの「ネオリベリズム」批判のかなめは、「ネオリベリズム」的な政策（個人の自己責任と数量的世界観を称揚する）が、ハビトゥス（過去の「経験」の身体レベルでの蓄積からなる分類枠組み）によって成立している「社会」を解体して、至るところに「不安定性」と「不確実性」を生み

だし、「他者への信頼」と「将来への希望」を失わせて「社会の窮状」をもたらすという点にある。

報告者の二人は、「社会の〈液状化〉」という課題設定に対し、各自の研究領域に引きつけて議論を展開した。「おたく文化」と「ネオリベラリズム」の問題は、一見まったく無関係に思われるかもしれない。しかし両者はともに、情報技術の発達によって急速に肥大化した「人工空間」(ex.仮想現実と国際金融市場)と、われわれの生身の身体(生物学的自然の制約から逃れられない)による対面的相互作用からなる「生きられる空間」(=社会・共同体)との間の葛藤・相剋の問題を扱っているとみることもできる。

(研究活動委員：加藤彰彦)

4. 2004 年度の研究助成について

2004 年度の申請について 2 件の申し込みがあり、前回理事会での審議の結果、申請書の再提出を依頼した。今回は再提出書類をもとに検討し、以下のとおり決定した。

. 2004 年度研究助成

研究題目：「普天間基地移設問題ならびにその反対運動に対して『地元』が抱いている意識に関する追加調査」

研究代表者：熊本博之（早稲田大学院文学研究科）

助成額： 15 万円

研究題目：「早稲田大学シュッツ文庫・未公開資料の整理検討に基づく

『行為動機的一般理論』の成立過程と理論的射程についての研究」

研究代表者： 木村正人（早稲田大学院文学研究科）

助成額： 15 万円

5. 『年誌』著作権について

『年誌』掲載論文の著作権に関して検討が行われた結果、次のように決定した。

本誌掲載原稿の著作権について

1. 本誌掲載原稿の著作権は、原則として著者本人に帰属する。
2. 早稲田社会学会は本誌掲載原稿の第一次刊行権を有し、本誌版下は早稲田社会学会に帰属する。著者による本誌掲載形態での再録・公開は禁止する。
3. 著者は、本誌発行年の翌年 4 月 1 日以降、本誌掲載原稿の単行本への再録および HP 上での公開ができる。再録・公開の際には、本誌掲載原稿である旨のクレジットをつける。
4. 著者による本誌掲載原稿の他の雑誌への再録は、禁止する。

6. 記念出版事業について

正岡会長より、「シリーズ あらたな視点と方法への冒険 社会学の再生」と題した記念出版事業の提案がなされた。

主旨

- ① 早稲田大学文学部社会学専修が誕生して 80 年、そして早稲田(大学)社会学会創設以来、50 年が過ぎた。これを機会に、早稲田社会学学徒のインテリジェンスの水準と想像性を結集して、「社会学のあらたな視点と方法への冒険」(仮称)シリーズを刊行し、どちらかといえば沈滞気味の日本社会学にあらたな一石を投じる。
- ② 早稲田社会学学徒はインテリジェンスだけでなく、早稲田社会学会に強くコミットし、その将来の発展を願って財政的なサポートを自発的に行う気概をもっていることを形にする。

シリーズ構成私案

1. 近代社会学再考: 社会学的前提の洗い出しと問い直し、「人間は社会的動物?」
2. 社会学理論のメタ分析と再理論化: マルクス、ウェーバー、ジンメル、デュルケム、トックヴィル、ターリー、ミード、シュッツ、パーソンズ
3. データ収集と社会的分析: 調査法、データ収集、データ構築と管理、データの共同利用、二次分析、調査倫理、統計的解析法
4. 歴史社会学と比較文化: 記述と説明、社会史、生活史・人生史、比較分析の方法とケース研究
5. グローバリゼーションとグローカリゼーション: 世界(国際)文化と地方文化、時間/空間、地域性
6. 人間個体群と個人の人生: 世代、コーホート、階層、ジェンダーの緊張(たとえば高齢者と若者)

編集担当 学会内に「シリーズ編集特別委員会」(仮称)を設置する。

執筆者の範囲 早稲田社会学会会員を各巻の編集者とし、執筆者が編集委員会と相談しながら執筆者を決定する(非会員を含めることも可)。

刊行期間 平成 17 年から順次出版を開始し、平成 18 年末をもって(第一次シリーズ)完了

出版社 未定

印税 基本的に学会に寄贈(ただし編集費を除く)。ただし増版部分に関して考慮の余地あり。

そこで、編集企画案および編集者、執筆者を募集いたします。多数のご応募をお待ちしています。なお、本件についての問い合わせ・ご応募は、学会事務局 (hanna1106@asagi.waseda.jp) までお願いします。

7. 入退会者のお知らせ

理事会において以下 4 名の入会が承認されました。(以下、敬称略)

2004 年 6 月 5 日理事会

尾高好晴 (早稲田大学大学院社会科学研究科)

2003 年 7 月 5 日理事会

浅輪 亨 (早稲田大学大学院文学研究科) 薦田祥子 (早稲田大学大学院文学研究科)

森 元孝 (早稲田大学文学部)

以下の会員から退会届が提出され、理事会において報告・承認されました。

2004年6月5日理事会

青柳 恒幸

老川 寛

以下の会員（2名）がご逝去されました。

菊池 幸子 2004年2月ご逝去

秋元 律郎 2004年6月28日ご逝去

8. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙（お名前と該当の未納年度を印字しております）を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。

会費を3年分以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます（次の3つの権利が失われます。①学会大会で報告すること ②『社会学年誌』へ投稿すること ③『社会学年誌』の配布を受けること）のでご注意ください。

2000年12月16日の理事会決議にもとづき、事務局では「未納会費の一部が納入された場合には、1997年度以降の最も古い年度の未納分から優先的に充当」する処理をとっております。したがって、本年4月以降にお振り込みいただいた会費が、本年度（2004年度）分ではなく、過年度の未納分として充当されている場合もあります。ご了承ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局（hanna1106@asagi.waseda.jp）までご連絡ください。

以上